

祖父の握りこぶし

熊本県・熊本市立出水小学校 六年

田中 ひかる

四月十四日午後九時二十六分。突然の縦揺れが熊本を襲った。いぶかしげにふり返った母の視線と私の視線がぶつかる。同時に縦揺れは、建物全体を揺り動かすような横揺れに変わった。「地震だ。」明日の遠足の準備を中断し、机の下にすべりこんだ私は、東日本大震災の時、テレビで流れた映像を思い出し、暗闇に落ちていくような恐怖で泣きわめいた。冷蔵庫、タンス、本棚、家にある全てのものがまるで生きているかのごとく激しく揺れる中、私はただ身を固くしてうずくまり泣きわめくことしかできなかつた。一旦、揺れが収まったのを見計らって、阪神・淡路大震災を経験した父が、

「まだ水が出るようなら、浴槽と家中の鍋に水をためるよう。」
と声を上げた。父と母が水をためるのに奔走する中、私は息を殺しながら揺れが収まるのを待ち続けた。

四月十五日。市立の全小中学校休校。揺れは大きかったが、自宅は大きな被害はなく、ほっとして一日を過ごす。

四月十六日午前一時二十五分。二度とないと思っていた地震が、また熊本を襲った。

十四日の揺れとは違う規模であることは、体感ですぐに分かった。建物全体がしなるように左右へ大きく動き、その度に、ゴオーゴオーと大地が荒れ狂う音が鳴り響く。あまりの揺れの大きさに布団にしがみつき、体を固定することしかできない。母が私の頭上に覆いかぶさるようにして必死に私を守ろうとする。父が私と母の手を固く握りしめる。その時の肌の感触だけが、唯一、私が生きているような証に思えた。何かにすぎるように私は祈りの言葉をとなえ続けるも、一向に揺れは収まらない。私は、もう駄目だと思った。大きく裂けた大地の中へ、熊本の町全体が転がり落ちていく。私は小さな虫けらのように、その中へ吸いこまれる。そんな映像が何度も頭の中でくり返された。

どれくらいの時間が過ぎたのだろう。カーテンの合わせ目から光がさしているのが見えた。朝だ。こんなに待ちわびた朝は、生まれて初めてであった。私は心の底からほっとした。外は、あんなに大きな地震があったとは思えないほどの静けさで、穏やかな鳥のさえずりが聞こえる。カーテンを開ける。私は言葉を失い、ぼう然と立ちつくした。

トイレのレバーを一回ひねるのに、六リットルもの水が必要だと知ったのは、その直後である。浴槽に、ある程度の水をためていたとはいえ、まだ十分とは言えず、私は両親と共に一キロメートル先の給水場まで足を運んだ。すでに多くの人が水を求め

てやって来ており、一人二リットルの水をもらうのに一時間も待たねばならないという。一時間待つて三人で六リットルの水を手に入れても、それはトイレのレバーを一回ひねる量にすぎない。私は、がくぜんとする思いだった。ようやく手に入れた水も今度は一キロメートル先の自宅まで運ばなくてはならない。二リットルとはいえ、歩いて運ぶとずしりと重い。こんなことをこれから先ずっとやっていくのか。たった一度の運搬で気持ちが悪く沈んだ。

店に行けども、開店していなければ物は買えず、学校に行きたくても、休校ならば学べない。地震が起きて、不自由な暮らしを体験して初めて、私は無数のだれかとつながって生きてきたのだと気付く。

電話がつながらなかった祖母と連絡がとれるようになったのは、ちょうどこの頃である。全員の無事を確認し、喜び合った後、祖父が最後にぽつりと言葉をこぼした。

「家が傾き、夜は避難所にいる。」

西に傾いたと聞いていた祖父の家は、外観上さほど変化はなく、私は内心ほつとして玄関へと急いだ。しかし、祖母が小さな花々を育て、いつも穏やかな空気に包まれていた庭は、ブロック壁が、まるで大型の動物が息絶えたかのように、大きなかたまりのままゴトリと崩れ落ち、洗濯バサミ、ハンガー、バケツなど生活の残骸が至るところにばらまかれ、目を背けたくなるような光景だった。私は背すじが凍るような感

覚で、それらの残骸を大きくう回しながら玄関のドアを開けた。無機的な空気がただよっていた。味噌汁や野菜の煮物のかおりがたちこめ、家上がった瞬間に、日々のやらなければいけないことから解放される、いつものあのあたたかい空気がないのだ。代わりに目の前には、大量のミネラルウォーター、カップラーメン、乾パン、生活必需品をつめこんだリュックなど当座の生きるために必要な物たちが、この家の住人のように居座っていた。被災者、そんな言葉が頭をよぎる。熊本県全体を襲った地震なのだから、私も被災者と言われればそうなのだが、私の場合とは全く異質の、もっと深刻な状況なのだとということを感じた。急に恐ろしくなると祖父母を見やる。二人は、事態をまるごと受けとめているかのように落ち着いた笑顔を見せた。

傾きがひどい西側の座敷に上がったとたん、事態は樂觀できないことを改めて実感した。足を踏んばらなければ前のめりになり、まっすぐ立ってられないのだ。確かに傾いている。私は用意していた慰めの言葉を飲みこんだ。この家がなくなるかもしれない。その不安が体中を駆けめぐり、血の気がうせる。祖父母はどうなる？私の帰る場所はどこだ？いろいろな不安が炭酸水の泡のように浮かんでは消え、消えては浮かぶ。けれど私は、その不安の一つにさえ答えを出せずに、小刻みに震える足で踏んばって立っているのがやっとだった。

不意に祖父が、座敷の東側に静かにビー玉を置いた。ビー玉は、何かにひっぱられるように、まっすぐに座敷の西側に向かって転がっていき、ふすまの縁でピタリと止

まった。行き場を失ったビー玉が、頼りなげに静止している。その姿は、この先どうしていいのか途方に暮れている私たち家族の心を表しているかのようで、悲しげに映った。ビー玉が直視させた現実には、あまりにもつらく、誰一人言葉を発する者はいなかった。

一回目の地震があった四月十四日の昼間、祖父は、趣味の写真を楽しんでいたそう
だ。

「つつじがあんまりきれいだったから撮っておこうと思ってな。」
と話しながら、数枚の映像を私に見せてくれた。穏やかに晴れわたった空の下で撮ったのであろう。朱色のつつじが色鮮やかに美しく映し出されていた。

「いつもと何も変わらない日だったのにな。」

そう言いながら祖父は、映像を先へと送る。どの映像も明るくさわやかだ。今を盛りとばかりに美しく咲くつつじに、心踊らせながら、シャッターを切った祖父の姿が思い浮かぶ。私の四月十四日も、祖父と同じくいつもどおりの日であった。いや、むしろ明日に遠足をひかえ、いつもよりわくわくして過ごした日であったかもしれない。まだあの日から数日しか経っていないのに、ずいぶんと遠い日のことのように感じる。もう、あの日のように明るい気持ちで過ごす日はこないのだろうか。そう考えていた時、急に映像が変わった。震災後の祖父の家の映像。棚が倒れ、物が散乱している様子や家が傾いている様子を撮ったものだ。あの日から一変したのだ。明から暗へ。白か

ら黒へ。祖父の写真が、そのことを強く物語っていた。

それらの映像を一通り見たところで、祖父が一言つぶやいた。

「ということ……。」

そのあまりに淡々とした声に、私は思わず祖父の顔を見つめる。目元にも口元にも、薄く笑みさえ浮かべた表情に、私は今、祖父がどんな思いでいるのか判断することができなかった。怒っているのか、悲しんでいるのか、前へ進もうとしているのか、あきらめているのか。ふと視線を落とした先に、祖父の右手が見えた。穏やかな表情とは裏腹に、その手は固くこぶしを握りしめながら、小刻みに震えていた。

お地藏様のような人。私が祖父に対して持っている印象である。いつも静かに穏やかにほほ笑んで、周りをその優しさで包み込む。無口な人だが、何故か人が集まってくるのは、祖父のそういう人柄に、人は時々ふれてみたくなるのだと思う。無口な祖父を支えるかのように、いつも隣に寄り添っている祖母もまた優しい人だ。

生来のまじめな性格が災いしたのか、祖父は五十代を迎えてから、生命の危険があるような大病をいくつも経験した。くも膜下出血、大腸癌、肝臓癌。聞くだけで恐ろしくなる病だが、そのいずれも祖父は克服してきている。

「今、生きていることが奇跡のようなことなんだ。」

と、以前父が、しみじみと語ったことがあったが、祖父が今日を迎えられるまでには、

相当な苦勞があつたのだと思う。最初の病を経験したのは、この家を建ててから数年後だったというから、祖父の身体の治療や看病以外にも、入院費、家のローン、子どもの教育費と家族みんなが、肉体的にも経済的にも大変な日々だったに違いない。だから、私たちは、せめて老後だけは、祖父母に穏やかな毎日を過ごしてほしいと願ってきた。どんな時にもこの家を守ってきた祖父母にとって、地震という思わぬ形で、家を失うかもしれない現実には、私には想像もつかぬほど、つらいことだと思う。子や孫に、心配をかけまいと気丈にふるまい、歯をくいしばり、無理してでもほほ笑んでみせる祖父の心の奥底には、やり切れなさや空しさや悲しみが入り混じっていてだから余計に、祖父のあの握りこぶしは、私の心に染みだ。

久しぶりに家族が集まったテーブルの下には、それぞれが、どんな言葉をかければよいのか苦慮している様子が痛々しいほど分かる空気が流れた。やつとこのことで祖母が口を開いた。

「市営住宅に応募してみようか。」

「この家を解体して、小さなプレハブ小屋を作ろうか。」

わざと陽気な口調で。だが、それらの言葉は、宙に放たれたまま、さまよい、誰もキヤッチする者はいない。この家を離れることなど考えられないのだ。祖母だって、この重い空気をかき消したくて、思わず出た言葉で、本心でないことは皆、承知であった。あの言葉の後にすぐさま、

「あの地震で、どこも壊れんと傾いたただけだったんだから、この家は立派よ。」と、申し訳なさそうに小さな声でつぶやいた祖母が可哀想になった。

祖父の病を見守りながら、家族と喜怒哀楽を共にしてきた家だ。この家を失うことは、家族の三十年の歴史を失うことでもある。

これからどうする……。

祖父は、テーブルの一点をじっと見つめたまま微動だにしない。背中に背負ってきたものが重すぎたのか、筋肉が固まったように曲がった背中を更に丸めて、沈黙のまま考えこんでいる。

祖父の手にはまだ、あの握りこぶしが固く握りしめられたままだった。

ライフラインの復旧を待ちわび、水や食料の確保に奔走していた地震直後よりも、しばらく経って、テレビに流れる映像が日常に戻りつつある頃の方が、空しさが募った。

千回を超える余震は、まだ日常に地震の影が、べったりとくっついていることを否応なく実感させた。しかし私は、震度七の地震も千回を超える余震も全て体験しておきながら、地震の前兆をただの一度も感じることはできず、いつ起こるか分からない揺れに、ただおびえて過ごす毎日だった。

地震で倒れた本棚の片づけをしていた時、見つけた『わが家の防災マニュアル（平

成二十三年八月熊本市発行』を見ると、今回地震のあった「布田川・日奈久断層帯」の今後、三十年以内の発生確率は、ほぼ〇%〜六%とある。この本の発行からおよそ五年後には、この断層帯で震度七の地震が、立て続けに二度も起きていることから考えると、地震発生確率〇%〜六%は、地震が起こる可能性が高いという数値になる。だが、一般的な感覚からするとどうだろう。もし、降水確率〇%〜六%であれば、大抵の人は、雨は降らないだろうと判断し、傘を持って外出することはないと思う。でも、これが、地震発生確率ならば、特有の見方をしないといけないということなのだろうか。一般の人々には、地震発生確率が低いと受け取られるようなこの数値が、熊本には地震はこないという楽観的な見方を促したのではないか。発生確率の伝え方に、もっと工夫があつていいのではないか。

かつて日本は、東海地震予知のために予算を投入し、法律も作った。あわせて、科学技術の進歩で、地震の予知は可能なのだという思いが私にはあつた。あだが、意外なことに、地震学には限界があり、

- ・いつどこでどの程度の規模の地震が起きるか確実な予知
- ・地震が起きた後、どの程度の規模の地震が誘発されるかの予測
- ・地震を起こすエネルギーがどれだけ蓄積されているかの測定

は、まだできないのだという。これは、人命を救うための地震研究が、まだ進んでいないということだ。おそらくこの事実は、一般の人々にはあまり知られていないこと

だと思う。そうであるならば、不意に起きる地震に対して、一人一人が備えをしなければならぬともっと伝えるべきなのではないか……。いろいろな思いが、あぶくのように出てくる。でも結局、地震を体験してみ分かったことは、何の前ぶれもなく地震は突然起きるということ。一たび地震が起きれば、私たちは地震の影にいつもおびえ、その不安を蓄積させながら、ずるずるとひきずるように生活しなければならぬということ。そして、自然の力に対して人間は無力だということだ。

週末は、できるだけ祖父母の家で過ごすことにしている。夜は避難所で寝とまりしている祖父母のストレスが、話すことで和らぐのではないかとの思いからだ。

少し早く着いたのか、まだ祖父母は避難所から戻っていないようで、私たちは外で二人を待つことにした。足、腰が衰えたために、ゆっくりとした足取りで、こちらへ向かって歩いてくる祖父母の姿が見えた。しかし、山積みとなったゴミ収集所に差し掛かってから、二人の姿が見えなくなった。心配した私たちは、二人を見失った場所まで走って行くと、黙々とゴミを片づけている祖父母の姿があった。震災で災害ゴミが大量に出たために、ゴミの収集が追いつかず、燃えるゴミも、もう三週間ほどそのまま放置されている。異臭がたちこめる周囲に、私は思わず息をとめた。大量のゴミは、通りをふさぎ、通行の邪魔になっていた。祖父母は、それらをできるだけ隅の方へ並べ置こうと作業していたのだ。

「腰が悪いんだから、もういいよ。」

と、父が二人を制止しようとする。

「ここを通る度に、悲しくなるばってん。」

と、ほほ笑みを浮かべながら、手をとめようとしない。見ると、ゴミはただ置かれたのではなく、投げ捨てられるようにして、放置されていた。それは、長引く被災生活に疲れはてた人々の心を表しているかのような捨てられ方だった。分別もされず、詰めこむだけ詰めこまれたゴミは無造作に投げ捨てられ、あちこちを向きながら放置されていた。口を閉じていないゴミ袋からは、ゴミが散乱しはえがたかり始めている。被災し、どこへ向かって歩いていけばよいのか分からない人々の心は、私と同じように空虚で、ささくれだつていて、だからもう、ゴミの捨て方などに心をとめる余裕などなくなっているのだろうと思った。無理もないことだ。みんな今日をどう生きるか、自分のことで精一杯なのだ。でも、同じく明日が見えない中で祖父母は、それでも不自由な体を酷使しながら、誰かのために力をつくしている。

引き寄せられるように、ずっと私の手がのび、ゴミ袋をつかんだ。同時に父と母の手ものびた。五人は、黙々とゴミの山と奮闘した。ゴミを指定の場所に出しても、それを処分場まで運ぶ人がいなければ、こうしてゴミは放置されたままだ。当たり前のことだが、ゴミが山積みとなり、異臭を放つようになるまで私は、その方たちのありがたさに気づくこともなく暮らしていた。今回の地震で、私がこれまで過ごしてきた

当たり前の日々が、どれほど尊くまた、どれほど多くの人々の力によって成り立っていたのかを今更ながら思いしった。まぶたが急に熱くなり、目の前のゴミがゆらゆらと揺れ動き始める。このゴミを片づけること、それが今、私が誰かのためにできる唯一のことに思えた。

平穏な日々が戻りますように。

熊本がまた元気になりますように。

祈るような気持ちで、私は一つずつゴミの袋を運んだ。

「これで終わり。」

祖父の声で視線を上げると、道路の端に沿って、整然とゴミが並べられていた。ゴミの数も、たちこめる異臭も前と同じではあったが、並べられたゴミには「処分場まで運んでくださってありがとう。」の心づかいが加わったような気がした。

「ちょっとしたことで心が豊かになるな。」

と、祖父がしみじみと語った。確かに祖父の言うとおり、自然に対して無力だと空しさを感じ、からっぽだった私の心に、じわじわと温かいものがしみ込んでくる。この収集所を見た人の心にも、わずかでも希望のような明かりが灯るといいと思った。例えば、顔も名前も知らない熊本の被災者のために、ボランティア活動を行ってくださいたり、熊本の商品を購入してくださったり、温かい励ましの手紙を送ってくださいたり、多くの人がいる。何か少しでも力になれないかと支援してくださる全国の人々の姿

に、多くの熊本の人々は勇気や希望を見たことだろう。

どんな状況でも、何か力になれないかと考え心が豊かになるようなことを実践する、そのことを祖父母や支援してくださる方々から教わったように思う。人は、自然の力には到底かなわないけれど、また立ち上がることはできるのだ。「大丈夫、熊本は大丈夫。」そんな思いが強くなり上げてきた。

祖父母は、互いに相手を気づかうように腕をとりながら、まだがれきの残る道を家へ向かってゆっくり歩いていく。私たちも、その後が続く。前に行く祖父母を見ていた時、

「病気になったのは嫌だったけれど、みんなが支えてくれたから頑張れたし、病気になったから小さな幸せにも気づくようになったんだよ。それに、じいちゃんは病気は必ず治ると思っているんだよ。」

以前、祖父が私に話してくれた言葉が、突然私の脳裏によみがえった。被災直後、祖父が握っていた固い握りこぶし――祖父のやり切れなさや空しさや悲しみが入り混じっていると感じた――には、「地震も必ず乗り越える。」という祖父の決意も込められているのだと思った。

とっさに私は、祖父母の間に走り寄り二人の手を取り並んで歩いた。「地震に負けん。」そう伝えるように私は祖父母の手を握りしめると、祖父母も「負けんばい。負けんばい。」と答えるように、二度、私の手を握り返した。

がれきの間から、濃紺のあやめが咲いているのが見えた。それは何か、まっすぐな意志のように空へ向かって咲き誇っていた。